

ペスタロッチ主義の歌唱教本と ダルクローズ・ソルフェージュ ——「教材性」という視点から——

関 口 博 子

1. はじめに

音楽には理論があり、その理論を基礎とした教材がある。さまざまな教則本や教本は、理論に重きを置いたもの、教材に重きを置いたもの、あるいは純粋な理論書、教材集など、それぞれ性質が異なる。教則本や教本の比較検討をする際には、それが理論に重きを置いたものか、教材重視か、その性質を見極める必要があるであろう。

筆者は、これまでに2つの別稿⁽¹⁾において、ジャック=ダルクローズ (Emile Jaques-Dalcroze, 1865-1950) のソルフェージュ、つまり『ダルクローズ・ソルフェージュ』(Dalcroze-Solfège) とペスタロッチ (Johann Heinrich Pestalozzi, 1745-1827) のメトードを音楽教育に応用させた最初の本格的な書であるネーゲリ (Hans Georg Nägeli, 1773-1836) /プファイファー (Michael Traugott Pfeiffer, 1771-1849) の『ペスタロッチの原理による唱歌教育論』(Gesangbildungslehre nach Pestalozzischen Grundsätzen, 1810) — 以下、『唱歌教育論』と略称 — の基礎練習の方法を具体的に比較検討し、両者の間にかなりの類似性が認められることを指摘してきた⁽²⁾。だがそこでは、音程や音階等の具体的な練習方法の比較検討が中心で、これらの教本の性質にまでは言及しなかった。つまりこれ

らの教本が理論に重きを置いたものか教材重視かまでは十分に検討してこなかったのである⁽³⁾。

本稿では、これまで別稿において行ってきた『唱歌教育論』を中心とするペスタロッチ主義の教本と『ダルクローズ・ソルフェージュ』との比較検討を踏まえ、両者の「教材性」⁽⁴⁾という視点から、新たな比較検討を試みたい。

2. ペスタロッチ主義の歌唱教本の「教材性」について

(1) 『唱歌教育論』

まずは、ペスタロッチ主義の教本を代表する『唱歌教育論』の「教材性」について検討したい。

『唱歌教育論』についてすでに筆者は、別稿⁽⁵⁾でその全体構成と概要、特徴について分析しているので詳細はそちらに譲るが、この本では、音楽をリュトミック (Rhythmik, リズム法)、メローディク (Melodik, 旋律法)、ディナーミク (Dynamik, 強弱法) の3要素に還元し、まず別々に、最も単純なものから徐々に難しいものへと学習の項目が配列され、それぞれの学習項目ごとに短い練習課題が出されているが、説明だけで練習課題のないところもある。音と言葉を結び付けた練習でも、まず音高と母音、子音を結び付けた練習から始め、それらの要素を徹底して練習した後でようやく、各要素を結び付ける。

このような性質から『唱歌教育論』は、“Lehre” (=理論) というそのタイトルの通り、教材というよりも音楽の学習項目をペスタロッチの直観教授法、段階教授法などのメトデーにしたがって配列し、まとめ上げたいわば音楽の教育理論書であると言えよう⁽⁶⁾。

(2) ドイツで1810年代に出されたペスタロッチ主義の歌唱教本

1810年の『唱歌教育論』の出版直後、その影響を受けた歌唱教本がドイツで次々出された。代表的なものとして、ナトルプ (Bernhard Christoph Ludwig Natorp, 1774-1846) の『民衆学校教師のための歌唱指導の手引き』(Anleitung zur Unterweisung im Singen für Lehrer in Volksschulen, 2Bde., 1813/1820) — 以下、『手引き』と略称 — を挙げることができる。ナトルプは、プロイセン政府より高等宗務局顧問官 (Oberkonsistentialrat) の肩書きを与えられ、音楽教育のみならず初等教育の改革に中心的に携わっていた人物で、シューネマン (Georg Schünemann, 1884-1945) が、「彼 [ナトルプ — 引用者] によってペスタロッチ主義の方法と理念がドイツのすべての学校教師の所有となった」⁽⁷⁾ と評している通り、ナトルプは、多くの学校教師に対して大きな影響力を持っていた人物である。ナトルプのこの教本についても筆者はすでに別稿⁽⁸⁾で分析している。その教本では、『唱歌教育論』と同様に音楽の要素をリュトミック、メロディック、ディナーミックの3つとみなし、まずリズムの練習から、続いてメロディー、ディナーミックの練習へと進めるが、『唱歌教育論』との決定的な相違は、個々の要素を別々に練習させるのではなく、既習の事柄に新しい要素を加えていくという練習方法を採用していることである。したがってすぐに、簡単な歌は歌えるようになる。

『手引き』の出版は、ドイツの他の教育家達にも大きな刺激を与え、コッホ (Johann Friedrich Wilhelm Koch) の『唱歌論』(Gesanglehre)をはじめ、多くのペスタロッチ主義の歌唱教本が出されている。それらの教本は、いずれもナトルプの『手引き』と同様、個々の要素を別々に練習させるのではなく、既習の事柄に新しい要素を加えていくという練習方法を採用している。したがって、簡単な歌はすぐに歌えるようになり、コラールのような歌もたくさん掲載されている。よって、このような性質からドイツで出されたペスタロッチ主義の歌唱教本は、ペスタロッチ主義という理

論に教材的な要素を加えたものであると言えよう。

(3) ネーゲリ編『学校唱歌集』

『唱歌教育論』がペスタロッチ主義音楽教育の理論書であるとするれば、その理論にしたがって、易しいものから難しいものへと唱歌を配列したものが、『学校唱歌集』(Schulgesangbuch, 1833)である。これは、1830年代のカントン・チューリッヒの教育改革の際にネーゲリが作成したもので、6巻構成で、チューリッヒを中心にドイツ語圏スイスのいくつかのカントン(=州)で必修教材として採用されたものである⁽⁹⁾。1年間で2巻ずつ3年間使うもので、いわば「教科書」であり、まさに教材そのものと言える。この『学校唱歌集』について長谷川博史氏は、次のように評している。

「この曲集 [『学校唱歌集』— 引用者] は、一定の目的のために体系的に選択・配列された文化素材、という意味での近代的「教材」の最初期のものといえよう。」⁽¹⁰⁾

近代以前の歌唱教材は、いわゆるコラール集であり、教育的な観点から体系的に配列されたものではなかった。それに対して『学校唱歌集』は、易しいものから難しいものへと唱歌が配列され、3年間という学校のカリキュラムのなかで使うものである。今日の小学校における歌唱教材の配列なども、1年よりは2年、2年よりは3年のほうが当然、難易度が上がっており、『学校唱歌集』は、いわばそうした教科書のあり方を最も早い段階で示したものの一つと言えよう。

3. 『ダルクローズ・ソルフェージュ』の「教材性」について

ここまでペスタロッチ主義音楽教育について、『唱歌教育論』、ドイツに

おけるペスタロッチ主義の教本、『学校唱歌集』を取り上げ、その「教材性」について考察してきた。では、『ダルクローズ・ソルフェージュ』は教材と言えるのであろうか。

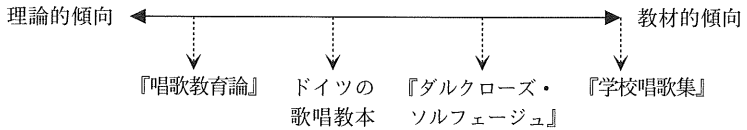
前述の通り、『唱歌教育論』と『ダルクローズ・ソルフェージュ』との類似性については、すでに別稿で指摘した通りであるが、『唱歌教育論』と『ダルクローズ・ソルフェージュ』とを「教材性」という観点で比較すれば、そこには大きな相違が見出せる。

例えば、音階については『ダルクローズ・ソルフェージュ』では、『唱歌教育論』のようにまずテトラコードを導入することはなく、全音・半音の区別がついた後はすぐに長音階をC-durで解説し、歌わせる。『唱歌教育論』では、音程のところでは音程だけの練習にとどまるが、『ダルクローズ・ソルフェージュ』では、長音階を導入すると直ちにその長音階にリズムをつけ、さらにニュアンスまでつけた練習をさせ、すぐにさまざまなリズムを持ち、強弱、ニュアンスもつけた12~20小節程度のメロディーの練習をさせている。その後、嬰種音階、変種音階へと進み、さまざまなニュアンス、フレーズの法則を導入し、既習の事項に新しいことを結び付け、徐々に難易度を上げていくのである。その形態は、ネーゲリ／プファイファーの『唱歌教育論』よりも、どちらかと言えばドイツで出されたペスタロッチ主義の歌唱教本の形態に似ている。ただ、『ダルクローズ・ソルフェージュ』のほうが、ドイツのペスタロッチ主義の歌唱教本よりも理論と練習曲との割合では、練習曲の比率のほうが大きい。また、その練習曲にニュアンスやフレーズといったより詳細な演奏法に関わる要素も加わっているので、いっそう教材的な傾向が強いと言える。

したがって『ダルクローズ・ソルフェージュ』は、ネーゲリの『学校唱歌集』のような完全な教材ではなく、理論的な要素もあるが、以上のことから教材とみなしても差し支えないと思われる。

4. ペスタロッチ主義の歌唱教本と『ダルクローズ・ソルフェージュ』との関係

以上、これまで「教材性」という視点からペスタロッチ主義の歌唱教本や唱歌集、『ダルクローズ・ソルフェージュ』について検討してきた。それぞれ理論的傾向が強い教材的傾向が強い、その性質を大まかに図示すると、次の〈図1〉のようになるであろう。



〈図1〉 ペスタロッチ主義の歌唱教本と『ダルクローズ・ソルフェージュ』の「教材性」の関係

すなわち、『唱歌教育論』はきわめて理論的傾向が強いが若干、練習曲も含まれる。ナトルプの『手引き』に代表されるドイツの教本は、簡単なコーラル等も含まれるので『唱歌教育論』よりは教材的傾向が強いが、『唱歌教育論』の理論を基礎にした構成であるため、理論と教材との中間的なものと言える。それに対して『ダルクローズ・ソルフェージュ』は、練習曲を中心に構成されているが、そこに理論的な説明も加えられている。一方の『学校唱歌集』には一切、理論的な説明は加えられておらず、純粋な教材と言えるのである。

『唱歌教育論』のように、リズムのセクションではリズムだけ、音程のところでは音程だけというように音楽の構成要素を別々に扱うのではなく、既習の事項に新しい要素を結び付け、それまで習ったことだけで歌える簡単な歌をすぐに歌わせながら、徐々に難易度を上げていくというドイツで

出されたペスタロッチ主義の歌唱教本の特徴は、その後の教則本、教科書に受け継がれていく。

それはドイツだけではなく、スイスでも同様である。スイスではネーゲリ以降、19世紀中期に彼の後継者とされるヴェーバー（Johann Rudolf Weber, 1819-1875）がベルン、チューリッヒを中心に改革を行ったが、彼の方法には、ネーゲリの影響とともに、ドイツのナトルプの影響も強く感じられる。つまり既習の事項に新しい要素を結び付け、それまで習ったことだけで歌える簡単な歌をすぐに歌わせ、難易度を上げていくというものである。

既習の事項に新しいことを結び付け、徐々に難易度を上げていくという形態は、『ダルクローズ・ソルフェージュ』にもみられるものである。したがって『ダルクローズ・ソルフェージュ』は、もちろんジャック＝ダルクローズ自身が、自らの理論にしたがって作成したものであるが、その教材の形態においては、ドイツのペスタロッチ主義の歌唱教本やスイスのヴェーバーらの教本との類似性を指摘することができるであろう。

このような既習の事項に新しい要素を加えていくという練習方法は、音楽の基礎練習の、一つの典型として19世紀以降、普及・定着してゆく。そうした時代の流れのなかに『ダルクローズ・ソルフェージュ』もあつたと言えるであろう。

註および引用文献

- (1) 『唱歌教育論』と『ダルクローズ・ソルフェージュ』との具体的な比較検討については、以下の2つの別稿を参照されたい。なお、2003年のものは両者の全体的・理論的な比較検討であり、2008年のものは、音程・音階の導入とその練習方法に絞っての比較検討である。

関口博子（2003）「ダルクローズ・ソルフェージュとペスタロッチ主義音楽教育」『リトミック研究の現在（日本ダルクローズ音楽教育学会創立30周年記念論文集）』開成出版、40-49頁。

関口博子 (2008) 「ダルクローズ・ソルフェージュにおける音程・音階の導入とその練習方法——ペスタロッチ主義の方法との比較検討を視点として——」『リトミック実践の現在 (日本ダルクローズ音楽教育学会創立 35 周年記念論文集)』開成出版、121-128 頁。

- (2) ジャック=ダルクローズとペスタロッチ、あるいはペスタロッチ主義音楽教育との関係については、詳細は上記別稿 (2003) を参照。

なお、ジャック=ダルクローズとペスタロッチ、あるいはペスタロッチ主義音楽教育との関係について論じられた先行研究はほとんどないが、唯一まとまった文献として、ジャック=ダルクローズとネーグリの関係について書かれた以下のものがある。

Boepple, Paul. (1913) *Ziele des Schulgesanges vor hundert Jahren und heute: Hans Georg Nägeli – Emil Jaques-Dalcroze*. Basel: Buchdruckerei Kreis & Co.

- (3) ただ、十分な検討ではなかったとはいえ、ペスタロッチ主義の歌唱教本や唱歌集と『ダルクローズ・ソルフェージュ』が、理論的な傾向が強いのか、教材的な傾向が強いのかといった視点からの比較検討は、2003 年の日本ダルクローズ音楽教育学会例会 (於: 東京教育専門学校) でのパネル・ディスカッション「リトミック教育における教材について」において筆者が、パネラーの一人として行ったことがある。本稿は、そのときの内容を基礎に大幅な加筆・修正を加え、まとめたものである。

- (4) 「教材性」という用語は定着しているわけではないが、教則本や教本がどれくらい教材としての性質を持つのかを意味する用語として本稿では用いる。

- (5) 『唱歌教育論』について筆者は、以下においてその内容と特徴を詳細に分析している。

関口博子 (2002) 「M.T.プファイファー／H.G.ネーグリの著『ペスタロッチの原理による唱歌教育論』(1810) 再考——プファイファーの実践と 3 人の役割に着目して——」『長野県短期大学紀要』第 57 号、47-58 頁。

- (6) ただし、この『唱歌教育論』には付録の唱歌集がついている。それはもちろん純粋な教材であるが、ここでは『唱歌教育論』本体そのもののだけを検討の対象とした。

- (7) Schünemann, Georg. (1968 [1928¹⁾]) *Geschichte der deutschen Schulmusik*. Köln: F.R.Kistner & C.F.W.Siegel & Co., S.319.

- (8) ナトルプの『手引き』について筆者は、以下でネーグリのプファイファーの『唱歌教育論』との比較検討を視点として、その内容と特徴について詳論している。

関口博子 (2005) 「B.C.L. ナトルプの唱歌教育論とその方法 —— ペスタロッチ主義という視点から ——」『音楽教育研究ジャーナル』(東京芸術大学音楽教育研究室)、1-15 頁。

- (9) ネーゲリの『学校唱歌集』の内容分析と、それがカントン・チューリッヒの教育改革において学校に必修教材として導入されていく経緯については、以下を参照されたい。

関口博子 (1999) 「19 世紀前期カントン・チューリッヒ (スイス) の学校教育におけるペスタロッチ主義音楽教育の受容 —— H.G. ネーゲリ『学校唱歌集』(1833) の分析を通して ——」『音楽教育学』(日本音楽教育学会)第 29 巻第 1 号、1-16 頁。

- (10) 長谷川博史 (1986) 「19 世紀前期ドイツの音楽教育状況 —— 音楽における市民教育と民衆教育 (3)」『聖徳学園短期大学紀要』第 19 号、261 頁。

その他の引用・参考文献

エミール・ジャック＝ダルクローズ、板野平・岡本仁訳 (1967/1976/1981²) 『ダルクローズ・ソルフェージュ (全 3 巻)』、国立音楽大学出版部。

Koch, Johann Friedrich Wilhelm. (1814) *Gesanglehre*. Magdeburg: bey Whilhelm Heinrichshofen.

Nägeli, Hans Georg. (1833) *Schulgesangbuch von dem Zürcherischen Erziehungsrathe für die Schulen des Cantons Zürich verordnet*. Zürich: bey H.G.Nägeli.

Natorp, Bernhard Christoph Ludwig. (1818 [1813¹]/ 1820) *Anleitung zur Unterweisung im Singen für Lehrer in Volksschulen*. 2Bde. Essen und Duisburg: bey G.D.Bädeker.

Pfeiffer, Michael Traugott & Nägeli, Hans Georg. (1810) *Gesangbildungslehre nach Pestalozzischen Grundsätzen pädagogisch begründet von Michael Traugott Pfeiffer, methodisch bearbeitet von Hans Georg Nägeli: erste Hauptabtheilung der vollständigen und ausführlichen Gesangschule mit drey Beylagen ein-, zwey- und dreystimmiger Gesänge*. Zürich: bey H.G. Nägeli.

Weber, Johann Rudorf. (1849-1855) *Theoretisch- praktische Gesanglehre als Anleitung zum Schulgesangbuch für die allgemeinen Volksschulen des Kantons Bern*. 2Bde., Bern: Stämpfische Verlagshandlung / Zürich: Friedrich Schultheß.

関 口 博 子

付記：本稿は、平成 20～24 年度科学研究費補助金（基盤研究（C））[課題番号：20520140] の助成を受けた研究成果の一部である。

※ 同朋福祉編集委員会規定により「研究論文」としての査読済み

（本学准教授・音楽教育学）